

---

# 「時効不成立」 10

長根兆半

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

「時効不成立」 10

### 【Zコード】

Z3000F

### 【作者名】

長根兆半

### 【あらすじ】

ハンガリーが一〇〇四年に、EU加盟を果たすと同時に開店したブダペストの「セーブ寿司」は、板前店長の菊田正春が頑張った。それから三年が過ぎた一〇〇七年の八月、狭間良孝は日本を出て十七年振りに初めて、ホリディーらしいサマー・ホリディーを四十日間取つた。この時、思いもかけない出会いが待つていた。

## 第9章 出会いの中で

「時効不成立」 10

### 第9章 出会いの中で

ハンガリーが一〇〇四年に、EU加盟を果たすと同時に開店したブダペストの「セーフ寿司」は、板前店長の菊田正春が頑張っていた。それから三年が過ぎた一〇〇七年の八月、狭間良孝は日本を出て七年振りに初めて、ホリデーらしいサマー・ホリデーを四十五日間取つた。

「飽きるほど飛行機に乗りましたが、観光らしい事がなかつたので、二か月ばかりヨーロッパを観光したい」と狭間が朱美に言うと、一か月にして欲しい、と言われ、それじゃ四十五日、という事で落ち着いた。

「仕方ないわね、頑張つてくれている事もあるし、それに、還暦でしょ、今年」と参暮朱美は言つて、そのお祝いも兼ねて、八月一日から九月十四日までに決つた。

この時期はヨーロッパに、観光客は押し寄せるが、日本レストランは比較的暇な時期だつた。

日本へも帰るのか、と参暮朱美に聞かれたが、分からないとだけ、狭間良孝は言つた。

臀部の張つた短足安定型の狭間良孝は、車でヨーロッパを回つてみたい。と言う衝動にかられ、中古のメルセデス・ベンツを買った。その日の夕方になつて、シナジミと車を撫でていると、携帯電話がなつたので、狭間は、朱美かと思い覗くと、違つていた。

「もしもし、クシィーバです。私、行きたいけど、いいかしら」と言つものだつた。

クシィーバは、菊田から話を聞いたと言つ。

ホリデイーに入る前、菊田と飲んで、ほんの冗談のつもりで、誰か相棒がいると楽しいけどなあ、と狭間が言つた事を菊田が店で言つたらしかつた。

仕事はどうするんだと聞くと、楽しくないから止めると言つていてした、と言つた。

何処でも、時給社員の出入りは激しく、狭間も、驚くには値しなかつたが、後ろめたさを感じた。

二人で旅行しようとしたが、クシィーバの身元がハンガリーではなく、ロシアからの亡命滞在だった事から、国外に出る事が出来ない事が解つた。

二人は急速な接近に、ためらう事もなく、国内旅行を楽しむことにした。

八月の建国記念花火大会がドナウ川で例年のように行われ、もうすぐ狭間の、ホリデイーも終わろうとしていた。

この時、狭間は、自分の年齢、老後と言う事を視野に入れてみた。そして、自分が戻れる筈のないことに、いまさらながら顔が曇つた。予算に問題はないが、言葉ができない事で、家を購入するにも、困難な事が解ると、クシィーバに相談してみた。

すると、彼女は住所不定だと語りだし、金はあるから、共同で家を買わないかと、言い出した。

小さいながらも購入し、イザ生活してみると、クシィーバは、これからは私が働くから、狭間はもつと好きなことをやれ、と言い出した。

九月にはいると、狭間は朱美に電話を入れた。

各国にある店には、日本人が居る、経営に対する信頼感も築け、狭間は、自分がいなくとも充分やつていけると思つた。

そのことを朱美に言つと、以外にあつさりとわかつてくれるのだった。

狭間良孝は参暮朱美が、ハンガリーに来ると、今後の事を話し合い、昔の知人と道で会い、お茶を飲み、分かれる、そんな感じを狭間は

持つた。

クリスマスが終わり、新年になると、参碁朱美から、五千ポンドの振込みが来た。

退職金とも、お祝いとも、とにかく肝とだと言つのだつた。外は、頭の真に錐を刺さされる様な極寒に、見事な樹氷が視界を飾つた。

狭間は、これから夢を描いてみたが、心のどこかには、黒い錘を感じないわけにはいかなかつた。

日本と同じ極寒の二月、庭木さえも樹氷になるのだった。

リョウとクシィーバはそれに見とれ、もうすぐ春だね、と言い合つた。

やがてスモモやアンズ、桃や桜の固い蕾が見える頃、それは、ブダペストのブダ側に新しく出来た日本レストラン「琵琶湖」での事だつた。

「ねエ、リョウ、どうしてリョウなの？」とクシィーバが、狭間に

聞いた。

彼は、今更のような気がしたが、聞かれてみると、その訳を話した事がなかつた事に気が付いた。

ハンガリーがE.U.に加盟し、シェンゲン協定に加盟し、いよいよヨーロッパの仲間入りを具体的に果たし、クシィーバと狭間は、国境がなくなつたのだから、旅に出ようか、と言つ話は出たが、遂に流れていった。

人も、物量も大きな動きを見せ、新しいレストランも増えていた。クシィーバと狭間は、珍しく最近新しく出来た「琵琶湖」レストランに入つていた。

二人は寿司カウンターの近くの、テーブルに着いた。

長い大きなカウンターの中には、日本人ではない東洋人の顔をした板前が一人、退屈そうに仕事をしていた。

昼過ぎというせいもあるのだが、ガランとしたカウンターに、紺の

背広をきちんと着こなした日本人らしい客が一人だけ居た。

二人は、窓際という事もあって、その客の丁度後ろのテーブルだった。

参暮朱美の五軒目の「セーブ寿司」が出来る前まで、ハンガリーに四軒あつた寿司の店の全てが、経営者は日本人で、日本風な作りの店だったが、今では十一軒になつていた。

店の作りもかなりバラエティに富んできていた。

何より、経営者の国籍がその文化を反映している事だった。

そして、東京、大阪、富士、桜と日本名を上げた看板の店内は、韓国、中国、ハンガリー色だった。

これは何もハンガリーに限つた事ではなく、イギリス、フランス、イタリアそしてオーストリアに行つても、何処の国の日本レストランも同じようなものだった。

俳画の紫陽花が、経営者の感覚なのか、逆に掛かっている事も珍しくはなかつた。

洋風の店内のそこそこに、日本人形や扇子、達磨のオモチャ、花札さいころなどを、置けばいいというように、やたらと、しかも雑然と置いている店もある。

日の丸や写楽のコピーを壁に張り、仏像を置き、パイプ椅子の店さえあつた。

ポリシーが有るのか無いのか、国際的なか、視覚には雑然さだけが飛び込んでくる。

日本人の高度な製作能力や優秀な技術の高さを、彼らは猿真似と言つて笑うが、彼らのやり方は、猿真似以下で、中身が空っぽ盗み取りだ。と、狭間良孝はいつも思つてゐる。

今も、この店内を見渡し、そう思つた。

立派な黒松の鉢植えだなと思つて近くで見ると、それは模造品だった。

「良孝の良、リョウつても読めるんだ」と狭間はクシィーバに向き

直つていつた。

「ずいぶんややこしいの、フーン」と、クシィーバは頷いた。

この話に、カウンターの客が感電したように頭をピクンと上げた。

「トイレ、どこですか?」とカウンターの客は、目の前の板前に声を掛け、教えられた方向を見ると、カウンター席から降りた。

この時客は、狭間と視線が合つたが、まったくの一瞬という事もあるのか、何の感情も、互いに受けなかつた。

狭間は、単に、矢張り日本人だつた、としか思わなかつた。

狭間とクシィーバは言葉について話をしていた。

「知らないほうが幸せな事だつて、一杯有るよ」と狭間が言つた。

「言える、聞かなきやよかつた事がある」とクシィーバは言つて、少し俯いた。

「どんな事?」

「リョウの年齢」

「そうだね、三十五も違つんだから、気にするのが当たり前だね」と狭間が言つた時、斜め後ろに視線を感じた。

狭間は、座り直す振りをして、その先を目の端に捕らえた。さつきトイレに立つたカウンターの客が、立ち止まってハンカチーフを使つていたようだつたが、狭間が動くと同時に、歩き出したようだつた。

客は、そのままカウンターに戻り、何か注文したようだつた。

「絶対に長生きしてよ」とクシィーバが無邪気に言つた。

「いつかも言つたけど、それだけは分からぬ、死ぬのは、歳に關係なく必ずあるんだしね」と狭間は言いながら、カウンターの客の背を眺めた。

後ろに目が有るのか、と言う事を、勘のいい人に言つ事があるが、狭間良孝はその客の背に、耳があるような気がした。

客は、何かを食べる為に手を動かしているのだが、椅子に背凭れるとか、腰の位置や座り具合を直すとか、あつてもよさそうなものだが、それもなく、まったく背は動かなかつた。

「俺にかまわず、いい人が居たら、そつちへ行つても良いよ。クシイーバの幸せは、俺の幸せなんだからね」

「そんな事言つて、病気になつたらどうする?」

「その時は救急車で行くさ。その時は知らせるから、ね」

「いやだよ、そんな事言つて、私を嫌いになつたのか」とクシイーバは、涙ぐんだ。

「大丈夫だよクシイーバ。誰かと幸せに暮らす事が出来るようになれば、クシイーバがまったく知らない内にそうなるから」と狭間は言つて、ふと一人遊びの昔が浮かび、この子がそうなるのは、無理かもしれない。厭世的かな。ふとそう思った。

「私は寂しいけど、リョウは寂しくないのか?」

「寂しくない人間なんて、居ないぞ」

「リョウはそれで良いかもしないけど、私はどうするの」「だから、もしいい人を見つけたら、好きにして良いつていうんだよ」

「そんな事言わないつて約束して、私、最後までリョウの傍に居る」「いや、こんな良い人に巡り会えたつて、言つてきて欲しい。そうすると、俺、安心だからね」と狭間が言つている間も、カウンターの客は、ピクリとも動かなかつた。

なんだらう、誰だらう、どうしたんだらう俺。と狭間は気になつた。

「リョウ、帰ろうよ」とクシイーバが言つた。

「ん、でももう少し居ようよ。後で、店の人に聞きたい事があるから」と狭間は、クシイーバへというより、カウンターの客にでも言うように言つた。

狭間は、飲み物の追加を頼もうと、店のものを呼んだ。

「彼はいつも来る人ですか?」と英語で狭間は、カウンターの客に目配せして言つた。

「ここ四・五日前から、昼と夜、毎日来ます」

「仕事のようですか?」

「いえ、観光という事でした」

「そう、ありがとう、あ、ジュース一つ、お願ひします」

狭間は、「彼はいつも来る人ですか?」だけ、客に聞こえよがしに言つた。

狭間とクシィーバはジュースを飲み終ると、店を出た。

メルセデスに乗つてから、もう一度、狭間は店を振り返つた。

冬時間の外は暗くなりかけ、気が付かなかつたが、やけに店の中が明るく見えた。

「どうしたのリョウ、なんか変だよ」とクシィーバは言つて店を振り返つた。

その時、クシィーバの携帯が鳴つた。

いつもの事だつた。

「リョウ、後一時間で、事務所へ行く」

「ああ」

狭間良孝にとつて、都合がよかつた。

どうせクシィーバは、行けば最低でも四時間は戻つてこない。

「送つて行くよ」と言つて狭間が時計を見ると、既に四時に近かつた。

あの客に会つてみたい。誰だろ?。昼夜と来るらしいが、今日の夜も来るだろ?か。

既にこの時間だが。

いや、会うべき人なら、必ず来る、狭間はそう思つた。

クシィーバを送り届け、「琵琶湖」に引き返えそうと思い、六時に行つた。

「琵琶湖」の明るい店内を外から見ると、中には、数組の客が居た。カウンター席に客は居なく、板前がぼんやり柱を背に立つてゐる。狭間は矢張り来ないかなと思つたが、待つてみることにした。

店に入ると、まつすぐにカウンター席に行つた。

たどたどしい日本語で、ウエイトレスがメニューを持つてきたが、これといった食欲もなく、ミネラルウォーターを頼んだ。

その水が来る前に、あの客は、狭間を追う様に間もなく入つて來た。

入り口に客の気配を感じ、狭間がカウンターから視線をやつた。入り口に立つた客と一瞬目が合い、そのまま動けなくなつた。その客も同じだった。

客と狭間良孝の視線は、引き合つようになに縮まり、客は狭間の横に立つた。

どこか緊張感が漂つ一人の様子に、目の前の板前までが、啞然として声を掛けそこなつっていた。

「山ノ神」と客は、小さく言った。

その声に、狭間は、ガタリと椅子から跳ね下りた。自分をそう呼ぶのは、この世で鈴城広州しかいない。

「コンペ・・・？」と狭間が言つのがやつとで、後は声にならなかつた。

驚き過ぎると、表情がなくなると言うが、今の狭間がそれであつた。コンペとは、狭間良孝が鈴城広州を、昔そう呼んでいた名前だつた。そこに水が運ばれて來たが、鈴城広州は少し歩かないか、と狭間良孝を外に誘つた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3000f/>

---

「時効不成立」 10

2010年10月11日15時05分発行